

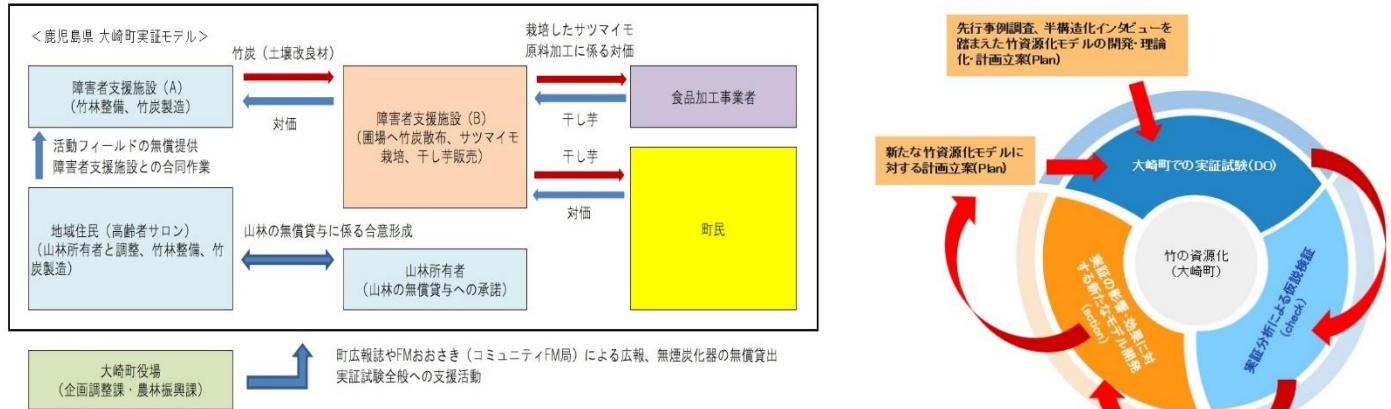
# 竹福商連携による竹の資源化モデルの開発と実践

## －障害者や高齢者が放置竹林の整備や竹材加工の担い手となるコミュニティとは－

田中 力(玉村研究室所属)

### 1 研究概要

本研究では、障害者や高齢者が放置竹林の整備や竹材加工の担い手となるコミュニティモデルを開発することで、放置竹林の拡大防止と竹材の利用促進、障害者や高齢者の就業促進を目的としている。この目的を達成するため、竹林を地域資源として活かすことを共通目標とした地域住民(高齢者サロン)や障害者支援施設、企業等の協働活動を生み出す「関係づくり」、効果的なマネジメント手法(制度、役割分担、手法)を開発し、その実践を通じて、当該モデルの有効性と汎用性を明らかにする。



### 2 研究背景

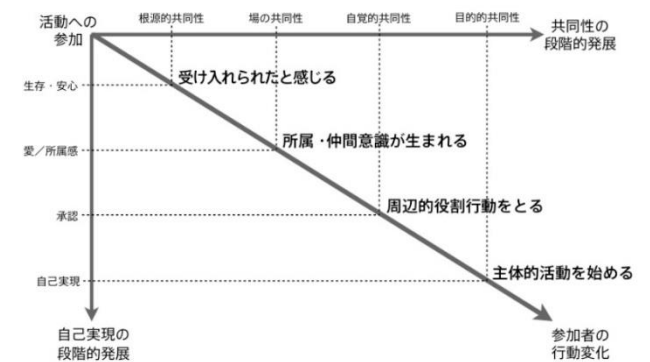
#### ●社会的背景

- ✓ 安価な輸入タケノコの増加、竹製品の利用の減少、さらに担い手の減少などで放置される竹林が増えている(林野庁、2018: 孫ほか、2021)。
- ✓ 放置竹林の拡大は、イノシシを始めとした野生鳥獣による農作物被害の拡大につながる(千葉県、2018: 大井、2019)。
- ✓ 竹林の適正管理とその有効利用が望まれ、小規模・低投資の竹資源化モデルの構築が必要(深澤、2014)。
- ✓ 高齢者の7割近くが、65歳を超えても働きたいと願っているのに対して、実際に働いている人は2割にとどまる(閣議決定、2016)。
- ✓ 一般就労および福祉的就労をする者は障がい者全体の1割程度、さらに15～64歳の障がい者数377万人の中でも2割強(厚労省、2021)。
- ✓ 働きたいと願う高齢者及び障がい者について、働く機会を創出し、就業促進を図る必要がある。

### 3 研究方法

#### ●リサーチクエスト

- TypeA: 当該モデルの持続性及び汎用性を確保するためには、どのような仕組み、マネジメント手法(制度、役割分担、手法)が必要か？
- TypeB: 取組参加者においては、どのような概念が持続性を確保するか？



共同行為における自己実現の段階モデル-拡張版(出典:坂倉ら(2015))

※ 竹の資源化モデルにおいても、「自分の行動が他者の幸福につながる実感が得られ、活動継続の動機」になり、持続性を確保する概念である可能性がある。

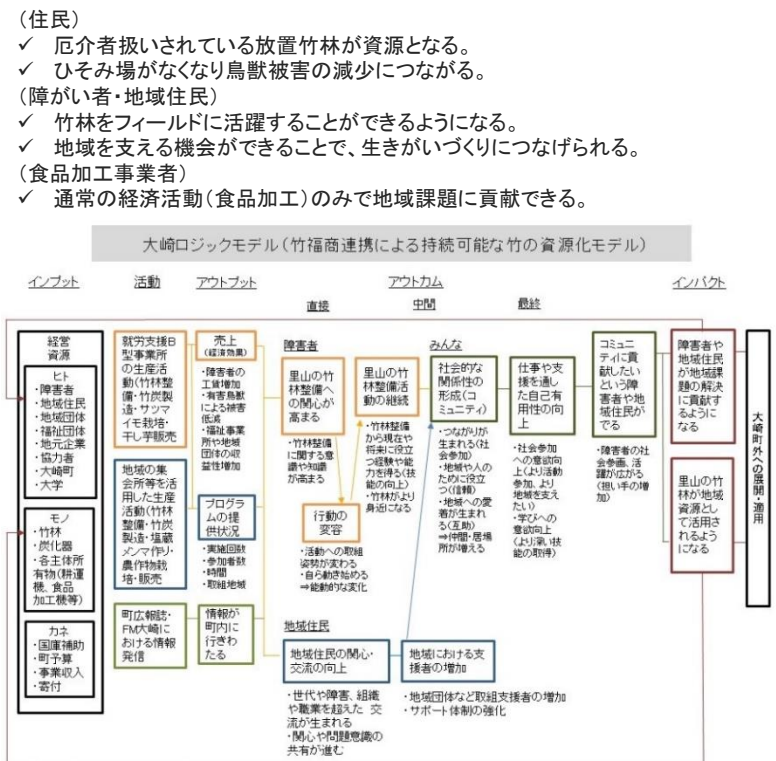
#### ●調査対象・分析方法

調査対象: 障害者支援施設の利用者・職員、地域住民、行政事例の収集方法: 半構造型インタビュー、参与観察  
分析方法: 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)

#### ●学術的背景

- ✓ 「関係性」や「相互性」に依存することにより出現する「弱さ」は、制度(ルール)や役割分担(ロール)、手法(ツール)の工夫によっては、相互補完ができ、結果として「強さ」に編集しなおすことが可能(金子 2002)。
- ✓ アウトカムを効果的・効率的に実現しようとする場合、地域住民や関係団体等の相互の効果的な役割分担や協働活動を生み出す「関係づくり」の促進が重要(玉村 2006)。
- ✓ 「つながりを作る」役割を自治体として担うことが必要(中島 2008)。
- ✓ 共同体意識が心理的well-beingに影響を与える(Pozzi MIほか 2014)。
- ✓ 担い手不足や耕作放棄地といった農業分野の課題と、障害者の就労の確保といった福祉分野の課題を両者の連携を通して解決しようとする「農福連携」のニーズが高まっている(濱田、2015)。
- ✓ 先行研究には、「障害者や高齢者による竹の資源化」、「竹の資源化に係る運用モデルの提言、有効性」を明らかにした研究は見られない。

### 4 期待される成果(ロジックモデル)



「竹林」という共有資源を活かし、地域と障がい者がつながり、コミュニケーションプロセスが生成されることで、相互理解が促進され、「誰もが誰かのために、共に生きる」新たな地域コミュニティの形成を目指す。